

8) OM line を基準とした CT sections の解剖と機能—脳染色法,  
第二報 剖検時の頭蓋開頭法

乙供 通則・岡部 慎一 (青森労災病院 脳神経外科)  
横山 佳明・齊川 裕子 (青森労災病院 放射線科)  
引地 基文 (弘前大学医学部 脳神経外科)

目的: 剖検により得られた脳を OM lines に cutting した際に, 病巣部と大脳の機能部位との関係を理解しやすくする為に, 剖検脳を機能部位別に色分けを行った。

方法: 剖検時の頭蓋開頭を OM lines と平行に行うと, 脳の cutting はこの時の創を目安に出来た。運動領野, 知覚中枢, 言語中枢, 皮質視覚中枢, 視床下部等を色別し, cutting 後に断面に色を延長塗布した。

結果・結論: 運動領, 言語中枢を含めて古典的な機能中枢が, CT, MRI, Positron CT などの出現によって新しく検討し直さなければならなくなった。この事は脳の断面を古典的な機能別に色分けし, 後日症例の臨床症状と病巣の位置関係を求める事によって解決出来ると思われた。

9) High resolution CT による正常下垂体の検討

一下垂体形態の各年齢層間における差異について—

田辺 純嘉・野中 雅 (札幌医科大学 脳神経外科)  
鈴木 進・坂本 靖男  
大坊 雅彦・端 和夫

10才より70才代までの各年齢層における正常下垂体の形態について検討し, 報告した。

症例: 正常下垂体症例 217 例 (女性 182 例, 男性 35 例) である。

検討方法: GECT/T 8800, 9800 を使用し, 1.5mm, 3mm slice の axial coronal CT より reformat 法で再構成画像を作製し, ① infundibular sign, ② 下垂体上面の形態, ③ 下垂体の高さ, ④ 下垂体茎の位置, ⑤ 下垂体茎の角度を計測し, 各年齢層 間において比較検討した。

結果: ① 下垂体容積は加齢とともに縮小し, 下垂体の鞍内占拠率は低下し, 髄液腔占拠率が高くなる。② 下垂体茎は加齢の影響を受けない。

10) Xenon-enhanced CT による Topographic r CBF map (flow map) 作成の経験

上山 博康・阿部 弘 (北海道大学 脳神経外科)  
野村三起夫・斎藤 久寿 (札幌麻生 脳神経外科病院)

11) 定位的視床手術による書癡の治験例

儀藤 洋治・安田 恒男 ((財)脳神経疾患研究所)  
神里 信夫・斎藤 均 (附属 南東北脳神経外科病院)  
渡辺 一夫 (同 脳神経外科)

書癡は心因性要素が多いとされるが, 他の筋トヌスの亢進が証明されることもあり局所性 dystonia に分類されるがその本態は明らかではなく, 薬物治療では改善をみない。私たちは書癡の患者に Stereotactic Vim-thalamotomy を行い治癒した 1 例を経験したので報告する。症例は, 67 歳, 女性。既往歴には高血圧症以外に特記すべきことはない。10 年前より看護婦として作中に注射などは可能なるも書字が困難となり, 種々の治療を受けたが改善せず退職するに至っている。入院時 CT, Angiography, EEG で異常はなく, 筋電図では前腕で不規則な grouping discharge がみられた。日常生活では, コップを持つ, 食事をする等は正常にできるが, 書字, 図形を描くなどは右手では全く不可能であった。この患者に対し, base line 上, PC より 5mm 前方, 正中より 13mm 外側を target point とした Stereotactic Vim-thalamotomy を行った。術直後より, 書字, 図形描写が可能になった。この症例について術中の深部脳波所見などを含め得られた知見を報告し, 文献考察を行う。

12) 三叉神経痛の治療法に対する検討

丹羽 潤・大滝 雅文  
森本 繁文・鈴木 進 (札幌医科大学 脳神経外科)  
野中 雅・田辺 純嘉  
端 和夫

三叉神経痛に対して神経ブロック療法を受け, その後痛みの再発に対して神経減圧術を行った 31 症例について術後の後遺症状を検討した。顔面痛は全例で消失したが, 術前に hypesthesia を認めた 22 例全例で, それが残存した。また dysesthesia は 9 例で術前とその程度は変らなかったが, 3 例で増強して自覚されるようになった。これら 3 症例では, 現在顔面のしびれ感, 術前の顔面痛に匹敵するほど苦痛となっている。これらの事実を考慮するならば, 三叉神経痛に対する治療の first choice は神経減圧術が選択されるべきであると考えられた。